

〔花き類の新品種の導入および品種改良〕
プリムラ・オブコニカの室内における観賞特性

吉岡孝行

(園芸部)

【要 約】オブコニカは、室内の弱光線下においても約35～40日間は観賞できる。中でも草勢が旺盛な‘F1プリノーローズ’は長期間に渡って観賞できる。

【目 的】

オブコニカは、室内の弱光線下においても長期間の観賞が可能であると言われるが具体的なデータがない。そこで、オブコニカの室内における観賞特性を明らかにし、オブコニカの消費拡大の資とする。

【方 法】

‘F1プリノーローズ（以下ローズと略）’他3品種、対照区としてプリムラ・ポリアンタ (*Primula* × *Polyantha*)、シネラリア (*Senecio Cruentus*) を供試した。オブコニカは2002年4月1日、288穴セルトレイに播種し、2回の鉢替え後に、2003年1月6日に6号鉢に定植、株張り約30cm、株高20cmのものを供試した。調査は2003年2月18日～4月7日の50日間、白色蛍光灯による照度450lx、日長12時間、平均気温15℃、同湿度54%の室内（中央制御室）に処理区あたりの5鉢を入室し、底面給水皿からのひも給水による管理下に置いた。観賞時の調査として7日ごとに花茎数、開花数、花がら数、展開葉数などを調べた。

【成果の概要】

- 1) 開花数の経時変化には品種間差が大きく現れた。‘F1タッチ・ミーレッド&ホワイトバイカラー（以下タッチと略）’の開花数が20日後に最多となったのに対し、他の品種は35日後が最多となった（図1）。また、同種を除くオブコニカは調査終了時に100輪以上の花を付けていたが、ポリアンタ、シネラリアは開花数を大きく減らした。バイカラー種は経過と共に花色変異が見られ、その他は淡色化した（データ略）。
- 2) 展開葉数は順調な増加傾向を示し、オブコニカは35～40日目が最多となり、‘ローズ、タッチ’は90枚前後、‘マゼンタ、アハト’は70枚前後を形成した（図2）。ポリアンタ、シネラリアは20日目あたりから一部の葉が間延びし、草姿が乱れた。
- 3) オブコニカの調査開始時の花茎数は6～10本であったが、調査終了時には20本以上となった。最多は‘ローズ’の31本で、本種の花茎は硬く、最後まで強い草勢を認めた（図3）。
- 4) 花がらはオブコニカの各品種とも27日頃から見られ、発生後の増加は著しかった（図3）。花がらはバイカラー種で目立ったが、取り除くとロート型の萼を観賞することができた。ポリアンタは花がらの発生後、開花が途絶える傾向が見られた。シネラリアは花がらを一気に増加させた後に、株は枯死した。
- 5) 以上の結果、オブコニカは室内で約35～40日間は観賞できた。中でも、草勢が旺盛な‘F1プリノーローズ’は長期間に渡って観賞できる。

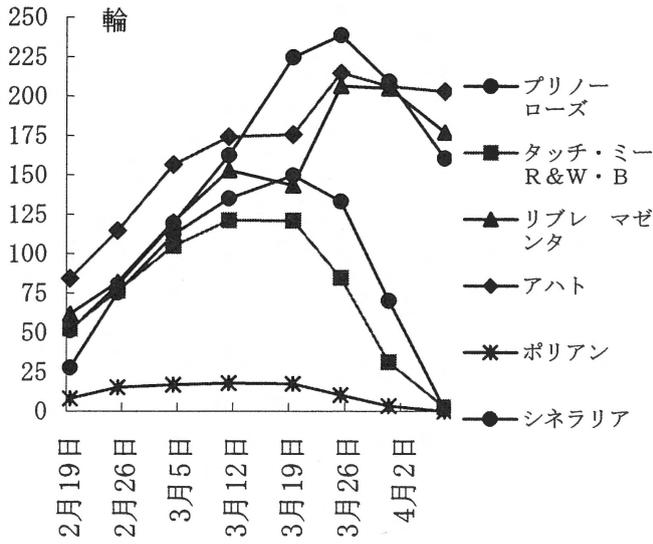


図1 開花数の推移

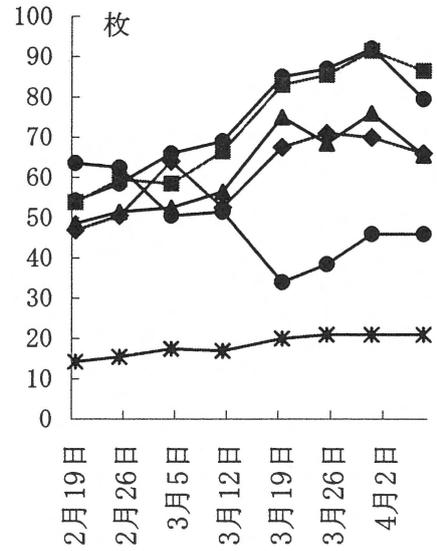


図2 展開葉数の推移

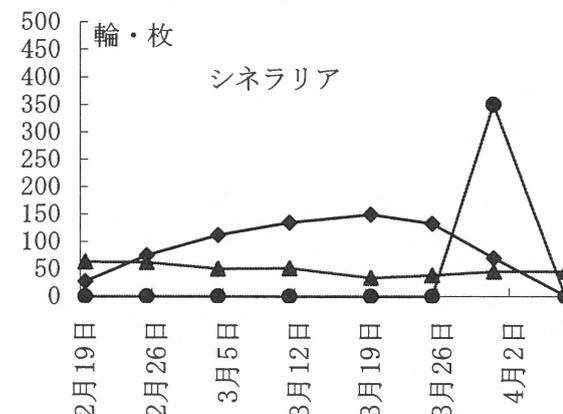
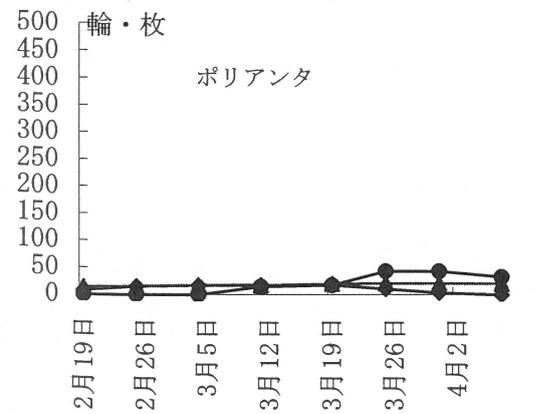
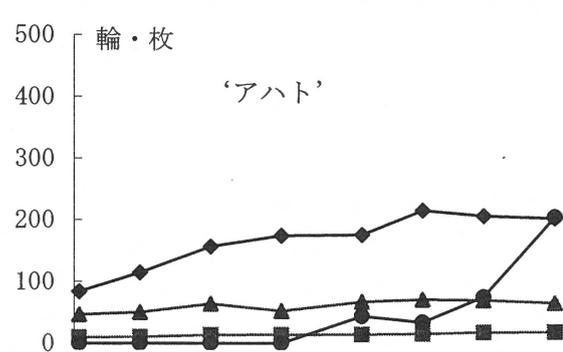
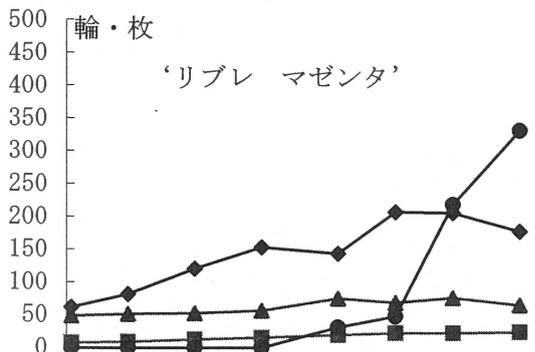
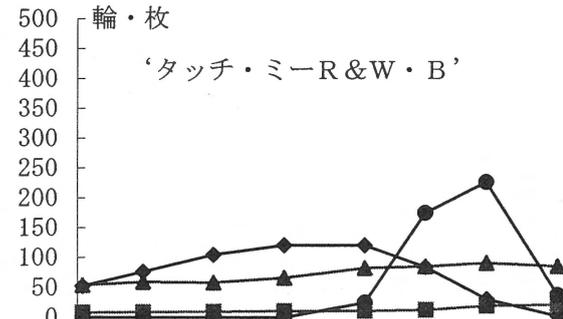
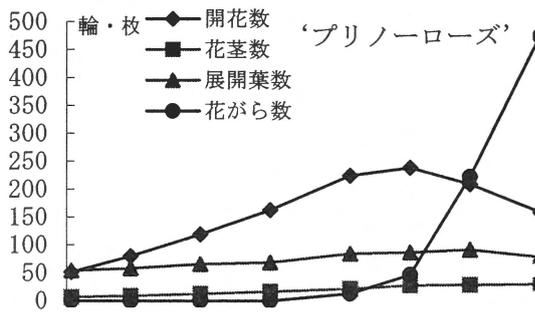


図3 開花数・展開葉数・花がら数・花茎数（オブユニカのみ）の経時変化の推移